

書き続ける才能を
応援したい。

第14回

坊っちゃん 文学賞



大賞に 卯月 イツカさんの 「名もない花なんてものはない」

大賞受賞者の声



卯月 イツカさん
昭和50年生まれ
大阪府在住

受賞の感想は
信じられないくらい
うれしい。応援してく
れた家族に感謝したい
です。
作品のテーマは

自分の高校のときの友人
のことを思い出しながら、
大人になりたいような、な
りたくないような時期の気
持ちは小説にしたいと思い
ました。
今後の目標は
つらい時や悲しい時に物
語に助けられた経験がある
ので、人に寄り添えるよう
な作品を書きたいです。



大賞の卯月 イツカさん(前列左)、佳作の吉田 勉さん(前列右)、ほか最終ノミネート作品の作者(後列)

「第14回坊っちゃん文学賞」の審査発表と表彰式が
11月26日、市役所で行われました。911作品の応募
の中から、大賞には卯月イツカさんの「名もない花な
んてものはない」が、佳作には吉田勉さんの「ひかり
駆ける」が選ばれました。

第14回坊っちゃん文学賞最終ノミネート8作品

- | | |
|-----------|----------------------------|
| 大賞 | 「名もない花なんてものはない」卯月 イツカ(大阪府) |
| 佳作 | 「ひかり駆ける」吉田 勉(埼玉県) |
| | 「ミラベルの庭」佐恵路 ゆう(兵庫県) |
| | 「海の颯」曾口 十土(松山市) |
| | 「旅立ちのしおり」川和 真之(東京都) |
| | 「今宵の月はネコの爪痕」こんべいじろう(東京都) |
| | 「アメリカン・コンプレックス」砂 濱子(東京都) |
| | 「ホテル神崎」高橋 未(群馬県) |

今回の坊っちゃん文学賞
は国内外から911作品の
応募が寄せられ、選考の結
果、8作品が最終ノミネー
トされました。審査発表
表彰式では、審査委員長の
椎名誠さんをはじめ、審査
員の早坂暁さん、中沢新一
さん、高橋源一郎さんから
大賞と佳作1作品の発表・
講評があり、野志市長らか
ら受賞者の2人に表彰状な
どが贈られました。
なお、大賞作品は、マガジ
ンハウス発行の情報誌「ク
ウネル」2016年3月号
(平成28年1月20日発売予
定)に全文掲載されます。

坊っちゃん文学賞の 募集広告が 「日本雑誌広告賞」 銀賞を受賞

文藝春秋に掲載した「坊っちゃん文学賞」の募集広告が、「第58回日本雑誌広告賞」第5部小スペース広告で銀賞を受賞しました。

向いてないと思う。向いてると思う。その繰り返し。

書き続ける才能を
応援したい。

第14回
坊っちゃん
文学賞

受賞した広告作品

問文化・ことば課
☎948-6634・FAX
934-1287

大賞作品あらすじ

駐輪場にとめていた自転車のスポークにアゲハの幼虫が挟まっていた。高校二年生の千花は、隣のクラスの山崎の力を借りて幼虫を救出する。これをきっかけに二人はちよくちよく話すようになり、千花はだんだんと山崎に惹かれていく。アルバイト仲間の巴さんにある日映画に誘われた千花は、そこで友人小夜子の母が不倫していることを教えられる。夏休み、図書館で偶然山崎と会い、その喜びをかみしめて

いる最中に、小夜子が男嫌である原因の一端は彼女の母親にあるのかもしれないと千花は気づく。夏休みも終わるころ、千花はカラオケに行つた帰りに、小夜子から「うちの母親はバイト先でどんな感じなのか」と探りを入れられる。やはり小夜子は母の秘密に気づいていたのだ。千花は何となく慰めればいいのかわからない。

文化祭が近づき、山崎のクラスは劇をするときかされる。その会話の際に山崎から「小夜子が気になつている」と告白され、千花は

シヨックのあまり学校を休む。見舞いに来たナオにそのことが好きだったのか」と問われ、否定も肯定もできない。

文化祭当日、小夜子と一緒に山崎のクラスの劇を観に行く。劇の内容に、二人は互いに何かを感じ取る。大好きだった祖父との思い出から、「好き」という気持ちのありかたについて千花は思いをめぐらす。文化祭は終わり夏も終わつていく。うとうとしているが、千花の気持ちはまだ山崎にあり、これから

大賞は面白い詰まった作品

今回もバラエティーに富んだ作品が集まった。早坂先生から厳しい言葉もあったが、それは、今の時代の青春文学への「もつとがんばれ」という激励だと思ふ。大賞作品は短い物語の中に青春の面白みが詰まっていた、総合点が最も高かった。

現代の青春文学の難しさ

いつの世も若者は、社会の圧力や抵抗を相手にしなければならぬが、現代の成熟した世界の中で青春文学をつくるのはとても難しい。そういった意味で、今回の坊っちゃん文学賞は、今後の分岐点として意味のあるものになったと感じている。

審査員講評

例年になく激論の審査に

社会が成熟し、青春に対する共通理解が無くなった今、青春文学のハードルはすごく高くなっている。今回は、大変な激論となつたが、私個人として「良いな」と思える作品がいくつもあり、納得のいく選考になつたと高橋 思つ。

時代を押し返すような作品を

今回は皆さんへの励ましの賞だと思つてほしい。昔と違って世の中が暗く、混乱しているとしても、それを跳ね返すのが若さ、そして青春である。きれいにまとまることなく、世の中を押し返すような作品にチャレンジしてほしい。